



階層的な自分と網的な自分

知らない人に「どなたですか?」と聞かれたら、どう答えるだろう。ほとんどの場合、「大学 学科の誰々」とか「会社 課の誰々」と答えることが多いのではないだろうか。

昔から有名な説に、「日本人のアイデンティティーは他人との関係の中にある」というものがある。家庭も学校も会社も、またその中にいる人も、それぞれ「何か」の下に要素として位置付けられている。要素であるそれぞれの個は、与えられた役割を適切にこなす。こうした枠組みによって生産性の高い、豊かな社会が実現できる……。この最大の「何か」を信じていれば、冒頭のような階層的表現で自分自身を表し、アイデンティティーとしていてもおかしくない。というより、つい最近まで、われわれはこうしたあり方以外の自分を知らなかったような気がする。

ところが、こんな話をはるか昔のことと思えるように、事態は大きく変化してしまった。「ネットワーク」という考え方が登場し、社会に実装されたからだ。

ネットワークは個々の要素がそれぞれ自由に結びつくことを可能にする、いわば「関係のかたち」を自由に操ることのできるフレームである。何らかのサブセットとして存在せざるを得なかった自分が、そのセット内の秩序や上位のセットを飛び越えて、はるか離れたセットにいる相手と直接コミュニケーションできる。

このように伝統的な枠組みから解放され、新しく自由に関係を作り出そうとする動きが、あらゆる場面で見られるようになってきた。そこにいる自分は、先の「階層的な自分」に対して、いわば「ネットワーク的(網的)な自分」と言ってもいいだろう。

おおざっぱに言えば、「階層的な自分」は、上下関係のはっきりした、統制の取れた組織の中できちんと役割を分担する自分である。一方の「網的な自分」同士はフラットな関係にあり、それぞれが自由に結びつくことで、既存の枠組みにとらわれない自由な発想を実現し、多様な可能性を追求できる。

実際、何か新しいことを構想し、実現しようとするれば、この二者の組み合わせ……というより、それぞれのメリット・デメリットを峻別したうえでの立場の切り替えが重要であることは言うまでもない。



新しいアイデアは、課長や部長といった肩書きを振り回していても出てこない。ここは「網的な自分」が活躍しなければならない。だが、何かを実行しようとするれば、誰かがイニシアティブを取り、組織を率いる必要が出てくる。そこで「階層的な自分」の出番である。

では、「網的な自分」と「階層的な自分」、どちらに軸足を置くべきなのだろう。

昨今は「階層的な自分」から解放されたのはいいけれど、帰属感を失い、多様な「網的な自分」の切り替えに疲れて虚構の世界に拠り所を求め、トラブルを起こしたりする例も多い。そんなこともあって、本当は「階層的な自分」の方が落ち着くのではないかと思う人も多いだろう。

だが、それぞれの関係のかたちに着目してみると、階層構造はネットワークの取り得るさまざまなかたちの特殊な例に過ぎないと考えられる。

もちろん常に組織に属しながらネットワークを駆使することも十分可能だ。しかし、常日頃独立した存在として経験を積み、プロジェクトごとにアライアンスを組んで、ある段階では「網的な自分」たちのフラットな関係からユニークな知を作り出す。次にネットワークを利用して最適な選択や調達を行い、プロジェクトを実現する。その経験やコネクションが次のプロジェクトにも生きてくる……。もはや組織に属するより、独立した個人の多様な経験が勝ちを生む時代が来ているのではないかという感が強い。

階層的な自分と網的な自分。この使い分けは、パソコン通信の時代から言われてきた話ではあるが、インターネットの普及で社会全体がダイナミックに変化しようとしている今こそ、再考すべきだと思う。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp